散策と思索の径

南シナ海の東と西

本多守（ほんだ まもる）
東洋大学アジア文化研究所客員研究員

二〇一〇年九月、ベトナム少数民族の文化を研究しているわたしは、フィリピン共和国のアルバイ州を訪問する機会をえた。

ベトナムとフィリピン群島のあいだには、南シナ海が横たわっているとはいえ、紀元前から文化交流があったことが考古学的にも知られている。

ベトナムとの比較を念頭に置きながら、フィリピン農村を訪ねた。

サン・ミゲル島家屋

サンアンドレ・マーケットでの米の販売

ティウイ市にある陶器工場の土産物屋

ベトナム米輸入量第一位の国

最初に訪ねたのはサン・ミゲル島である。この小島は台風発生場所が近いため、しばしば被害を蒙る。そのため海岸に沿って防砂林が続き、その背後の道路沿いに集落ができ、ニッパ椰子やトタン屋根の簡素な家屋と家庭菜園が並んでいる。キャッサバ、じゃがいも、トウモロコシ、ココナツなどの作物も作るが、漁業が主産業であり、ベトナムの沿岸部と同様に、小魚から塩辛も作られる。この島には田が極端に少ない。

あまり知られていないかもしれないが、じつはフィリピンはベトナム米の輸入量第一位の国である。一人当たりの稲の作付面積は、他の東南アジア各国より少なく、米が不足している。台風の被害もあるので生産性が上がらないのである。だから、輸入で米不足を補ってきた。たとえば日本が、風雨対策のために、稲の品種改良を重ねて乗り越えてきたのとは対照的だ。

フィリピンと緯度が近いベトナムも、台風による洪水被害が有名である。そのため政府は、新品種導入や、大規模灌漑事業など、農業政策に力を注いできた。その甲斐あって米の輸出量は、今や世界第二位である。ただ、近年は自国経済の安定化のため、価格変動の影響を受けやすい米のような一次産品への依存を良とせず、工業化を急いでいる。

棚田ブランドのイフガオ米

米については、マニラ市内にあるサンアンドレ・マーケットを訪ねた際にも、思うところがあった。市場にはベトナムでもおなじみのマンゴー、ドリアンなどの熱帯フルーツが並んでいる。しかし、わたしがこの市場で興味を引かれたのは米であった。

各種高級米がキロ単位で売られていた。香米四五（フィリピンペソ、以下同様）、もち米六五、オーガニック四八、ジャスミン五五などであった。

オーガニック米の産地はイフガオ州である。イフガオでは、ユネスコ世界遺産に指定された棚田保全のために、伝統的農法での米栽培がおこなわれていると聞く。一般的な米はキロ当たり三〇ペソ前後だから、ブランド商品化に成功したのだろう。このイフガオ米はその一・五倍の価格である。

いっぽう、農業人口が八割に近い農業国ベトナムの市場でも各種の米が売られているが、わたしの知る限り、国内特定産地のブランド米、タイや台湾などから来た外来種の米が高級米として市場に出るものの、オーガニック米が市場で売られるという例は思い当たらない。オーガニック米は特別注文でやっと手に入るようである。ベトナムでは米の流通経路の不透明さや品質の保持に問題があるため、市場には出にくいのかもしれない。

産業から芸術へ

では、地場産業的な手工業品の流通についてはどうだろうか。ティウィ市では素焼きの陶器の産地も訪ねた。車同士だとすれ違うのも困難なくらい細い道を登ると、左右に小さな製造所兼土産物屋が並んでいる。伝統的に鍋や壺などの生活用品を作ってきたそうだ。ある工場を見学させてもらったが、混合・粉砕機や電動ろくろ、巨大な焼成窯など、量産体制が整っている。色彩も豊かになり、花瓶、草履や靴の形をした置物、携帯ストラップのような土産物など商品構成を多様化して販路を拡大し、産業を維持しているとのことであった。

ベトナムの伝統手工業も、あらたな企業展開を開始している。ビントゥアン、ニントゥアン両省では、海上交易でも栄えたチャムによる王国の時代（一〇―一七世紀末）に、高度な灌漑技術に基づく稲作と、各種手工業が盛んだった。今でも水甕や壺など生活用品が野焼きで作られる。近年、地方自治体レベルのプロジェクトで新デザインの開発が進み、焼き物の芸術家の活動も目立っている。多民族国家を標榜し、民族や地域ごとの文化の保護と育成を国が支援してきたせいか、ベトナムでは、少数民族文化の観光業や芸術との結びつきが、フィリピンよりも顕著にあらわれている。このように南シナ海の東と西を比較してみると、やはり、地域や民族の文化の振興には、国家や地域の政策的支援が不可欠なものに思われた。

電動ろくろ

サン・ミゲル島への到着